

会長挨拶

会長 池内 浩基

(兵庫医科大学炎症性腸疾患外科)



この度第24回日本消化管学会教育講演会の会長を拝命しました兵庫医科大学消化器外科学講座炎症性腸疾患外科の池内浩基です。本教育講演会は年2回春と秋に行われています。春はGI Weekと一緒に開催されており、秋はオンラインで単独開催となっています。オンデマンド配信も行われる予定です。

今回のテーマは「不可能を可能にする消化器病学の進歩」とさせていただきました。消化管疾患の検査、薬物治療や外科治療の進歩は著しいものがあり、一昔前までは切除が困難であったような進行癌でも切除可能になり、予後の向上が期待できるようになってきました。また、炎症性腸疾患領域でもここ数年、新規治療薬の承認が続いており、難治で手術となる患者さんは減少しています。

コンバージョン (conversion) 手術という言葉をよく聞くようになりました。診断時に手術による根治切除が不可能と判断された進行癌に対して化学療法が奏功し腫瘍が小さくなったり消失したりすることで、根治切除を目指せるようになった段階で手術を行う治療です。最近では分子標的治療などの薬物療法の開発が進み、コンバージョン手術が可能な患者さんも多くなってきました。コンバージョン手術の現状を食道癌、胃癌、そして大腸癌の領域の第一線の先生にご講演いただく予定です。

検査の領域では、今回はリキッドバイオプシーを取り上げました。リキッドバイオプシーは、血液など低侵襲性の液体生体試料を用いて診断や治療薬の選択等に役立つ技術であり、内視鏡や針を用いた患者負担の大きい生検に代わり、繰り返し行うことができる検査方法として近年注目されています。腫瘍組織検体を用いた検査に比べると感度が低いなど、まだまだ問題点はありそうですが、現状をご講演いただけたらと思います。

IBDの領域では短腸症候群と難治性潰瘍性大腸炎の緩解導入療法を取り上げました。短腸症候群はクローン病だけでなく、先天性疾患や血栓症による消化管の大量切除後に遭遇する病態です。長期に亘る輸液療法が必要になるわけですが、新薬の導入により、輸液量の減少や輸液からの離脱が可能になった症例も増加しており、QOLの向上に繋がっています。難治性UCの治療薬の選択に関しては、一般の消化器内科医も困っているところです。病態別の治療薬の選択についてもご講演いただけるものと思っています。

多くの先生に聴講していただき、最新の知識を得て、日常の診療に役立てていただければと思います。

第24回日本消化管学会教育講演会 プログラム

不可能を可能にする消化器病学の進歩

2025年9月7日（日）10：25～15：25
オンデマンド配信期間：2025年9月10日（水）正午～10月8日（水）17：00
※ランチョンセミナーはライブ配信のみとなります
会場：完全オンライン開催（オンデマンド配信あり）
会長 池内 浩基（兵庫医科大学炎症性腸疾患外科）

開会挨拶

教育講演1（10：30～11：10）

「切除不可能な食道癌を切除可能な食道癌へ」

司会：小柳 和夫（東海大学医学部消化器外科）

演者：加藤 健（国立がん研究センター中央病院頭頸部・食道内科）

教育講演2（11：15～11：55）

「切除不可能な胃癌を切除可能な胃癌へ」

司会：掛地 吉弘（神戸大学大学院医学研究科外科学講座食道胃腸外科学分野）

演者：坂東 悦郎（静岡県立静岡がんセンター胃外科）

教育講演3（ランチョンセミナー）（12：05～12：55）

「短腸症候群の特徴と安全な管理」

司会：水島 恒和（獨協医科大学外科学（下部消化管）講座）

演者：渡辺 和宏（東北大学病院総合外科）

共催：武田薬品工業株式会社ジャパンメディカルオフィス

教育講演4（13：10～13：50）

「切除不可能な大腸癌を切除可能な大腸癌へ」

司会：金光 幸秀（国立がん研究センター中央病院大腸外科）

演者：片岡 幸三（兵庫医科大学消化器外科学講座下部消化管外科）

教育講演5（13：55～14：35）

「Liquid biopsyの現状と未来」

司会：山田 岳史（日本医科大学消化器外科）

演者：中村 能章（国立がん研究センター東病院トランスレーショナルリサーチ支援室）

教育講演6（14：40～15：20）

「難治性潰瘍性大腸炎の寛解導入療法」

司会：久松 理一（杏林大学医学部消化器内科学）

演者：江崎 幹宏（佐賀大学医学部内科学講座消化器内科）

閉会挨拶